

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『新編酔翁談録』成立考：書名および編者に対する考察を中心として
Author(s)	孟, 夏
Citation	中國中世文學研究, 72 : 1 - 17
Issue Date	2019-03-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047685
Right	
Relation	



酒にあるのではなく、山水の中にある。山水の楽しみを、心で味わいながら酒に託したのである。……やがて夕日が山に落ち、人影がばらばらになるのは、太守が帰り支度をはじめ、賓客たちがそのお供をするのである。木々がかげり、さえずりが木の上や下でするのは、遊びに来ていた人たちが帰り、鳥たちが楽しんでいるのである。しかし鳥たちは山林での楽しみは知っていても、人々の楽しみは知らない。人々は太守の遊びのお供をして楽しむことは知っていても、太守がみんなが楽しんでいるのを楽しんでいるのだということには知らない。酔っぱらっては彼らと楽しみを同じくし、酔いから醒めてはその楽しむさまを文章につづることができるのは、太守である。太守とは誰のことか、廬陵の歐陽修である。

この「酔翁亭記」は後世の文人たちにも大きな影響を与えた。時代は下るが、例えば明代の『琅琊代醉編』について、四庫提要（『四庫全書総目提要』卷一三二・子部四二・雜家類存目九）には以下の記述がある。

『琅琊代醉編』四十卷。明張鼎思撰。鼎思有『琅琊曼衍』、已著錄。是編乃其自給事中謫滁州馭丞時雜鈔諸史百家之言、臚次成書。名曰代醉編者、歐陽修在滁州時有酔翁亭、鼎思適宦其地、以著書代飲酒也。其書体例龐雜、無所折衷考訂、特借以消閑遣日而已。『琅琊代醉編』四十卷。明の張鼎思の撰。張鼎思は『琅琊曼衍』という書物を編纂したが、そのことは

すでに記録した。この書は張鼎思が給事中から滁州馭丞に左遷された際に諸史百家の言を集め連ねて書物としたものである。『代醉編』と名付けたのは、歐陽修が滁州に任官した時に酔翁亭を建てたが、張鼎思もちょうど同じ土地に任官し、酒を飲む代わりに書物を編纂したからである。この書物の形式は繁雑であり、取捨選択や校訂することがなく、ただこれをもって暇つぶしをしたというだけである。

これによれば、『琅琊代醉編』の「琅琊」「代醉」は、いずれも「酔翁亭記」を踏まえたもので、書名の由来は撰者である張鼎思が、歐陽修と同じく滁州に任官したからだという。「酔翁亭記」がその内容はもとより、歐陽修その人、あるいは彼にゆかりのある土地（滁州）と深く結びつく形で受容されていたことがわかる。

「酔翁亭記」の末尾には「廬陵歐陽修也」と記されている。「酔翁亭記」は、特に彼の故郷である廬陵の文人たちに大きな影響を与えたようである。例えば北宋の朱長文によって編纂された『墨池編』卷六「宋碑」には、宋「酔翁亭記」、歐陽修撰、蘇軾書、吉安府学明倫堂。宋代の「酔翁亭記」は、歐陽修によって作られ、蘇軾によって書かれ、（この石碑は）吉安府学明倫堂にある。

とあり、歐陽修の故郷廬陵にある吉安の府学に「酔翁亭記」を刻んだ石碑が建てられたことが記されている。ま

た、南宋の楊万里によって作られた「酔楽堂記」（『楊万里集箋校』卷七六）には、以下の記載がある。

（歐陽紹之）即日自駕柴車、帰安福東門外、秀峰之西麓、開三徑、墾九畹、垣一圃、内卦千畦。……日与方外之士觴詠其間、乃作一堂、奄有万景。揭以酔楽、師我酔翁。堂成、与客落之。客曰、「酔翁之楽、不在酒而在山水之間、子之楽何如。」紹之笑曰、「我酔欲眠、姑俟他日。」

（歐陽紹之は）その日自ら柴車に乗って、安福の東門の外、秀峰の西のふもとに帰り、庭を作り、花畑を開き、一区画の畑を囲み、更に小さな区画に分けた。……（歐陽紹之は）かつて俗世間から離れた人々と一緒にここで酒を飲んで詩やうたを詠じ、一つの堂をつくり、この堂から様々な景色を鑑賞できるようにした。酔楽と名付け、酔翁をまねしようとした。堂が完成すると、（歐陽紹之は）客と一緒に落成の祭りをした。客が「酔翁の楽しみは、酒にはなく山水の間にありましたが、あなたの楽しみはどうでしょうか」と言ったので、紹之は笑って、「私は酔って眠くなったから、またにしよう」と言った。

この記述からは、歐陽紹之が「酔翁」つまり歐陽修をまねて、酔楽堂で宴席を設け、文人たちと詩を詠じ、語らっていたことがわかる。

一方、『酔翁談録』の扉には、「廬陵羅燁編」と題されている。「酔翁」とあり「廬陵」とあるところから、『酔

翁談録』という書名が欧陽修の「酔翁亭記」を踏まえていることは明らかである。編者羅燁は、自らが「廬陵」の人であることを明記することで、欧陽修と同郷であるということとを前面に押し出しているようでもある。羅陵の文人たちが「酔翁」の影響を受け、石碑や堂など「酔翁」に関するものを建てていることから、『酔翁談録』の「酔翁」は欧陽修が意識されていると見て間違いないだろう。但し、成立年代から考えてみても、「酔翁」が欧陽修本人のみを限定して指すとは考えがたい。むしろ「酔翁」は、郷土の誇り、廬陵の代名詞というべきものとして用いられているようである。書名に「談録」と付けられていることからすれば、『酔翁談録』は、欧陽修を想起しつつも欧陽修に限定されない「酔翁」を中心として文人たちが集まり、そこで語られた話が記録されたものだということになりそうである。ではなぜ編者は書名を『酔翁談録』としたのか。以下、廬陵の羅氏の文学活動を検討することによって、この問題を考えてみたい。

二 廬陵の羅氏一族

羅氏は廬陵の名族である。『民国廬陵県志』（『中国地方志集成』江西古籍出版社、一九九六年）には羅氏に関する以下のような記述が見られる。

燻下秀川羅氏隸六十都。始祖煎、唐咸通間由豫章西山徙居廬陵化龍郷折桂里戡村（宋宣和三年改郷曰化仁、国初并為延福）。崩季子達遷秀川橋廬、八世孫緋

居印岡、九世孫無党居澄溪、十三世孫履泰居犀屏、二十五世孫応光居中市、皆在秀川左右〔梁天祐五年、秀川更名熾下、其後統稱熾下〕。秀川羅氏科第起家、自縹与浩然始⁶⁾。

熾下秀川の羅氏は吉水県の六十都の管轄下に置かれていた。元祖は羅崩である。唐の咸通年間、羅崩は豫章西山から廬陵化龍鄉折桂里戡村に移った〔宋の宣和三年、郷名は化仁に変わり、民国初、他の地方と合併して延福となった〕。羅崩の第三子羅達は秀川橋廈に移り、八代目の子孫羅縹は印岡に住み、九代目の子孫羅無党は澄溪に住み、十三代目の子孫羅履泰は犀屏に住み、二十五代目の子孫羅応光は中市に住んだが、これらの土地はすべて秀川の周辺にある〔後梁の天祐五年、秀川は熾下と改名し、これ以後一貫して熾下と呼ばれている〕。秀川の羅氏が科挙で家を興すのは、羅縹と羅浩然から始まった。

廬陵羅氏の中で、最も影響力があったのは秀川の羅氏である。『廬陵県志』によると、秀川の羅氏は科挙で家を興し、南宋の時代には何十人も合格者を出したという。廬陵における他の羅氏一族は、大部分が秀川羅氏の子孫である。つまり、廬陵羅氏は地方の文化的名族だと言えよう。

では廬陵羅氏とは具体的にどのような人々であったのだろうか。南宋の楊万里の「羅氏一經堂序」〔『楊万里集箋校』巻八一〕には、以下のような記載が見られる。

博し、澹菴先生胡侍読（銓）などの有名人は、皆羅元通と交遊した。

これらの記載から、秀川羅氏の子孫は、四代に渡って「詩経学」の学問を受け継いだことがわかる。「詩学」の大家である羅天文のもとには、多くの人々が弟子入りにやって来たが、羅天文は貧富にかかわらず等しく学問を伝授し、さらに羅天文の息子羅元通も父の学問を継いで多くの弟子を育て、当地の名士胡銓と交際したという。

羅天文一族以外に、完塘、東西塘の羅氏も、学問で名声を得た。特に東西塘羅氏の族人羅敬夫は、万巻楼という蔵書楼を作り、大量の書物を収蔵したという。例えば楊万里「羅氏万巻楼記」〔『楊万里集箋校』巻七五〕には次のように述べられる。

……出凝婦門北東四十里而近、為完塘之羅。自武岡公以泓澄演進之学、蘄刻卓詭之詞、第建炎進士、其族遂鼎盛。由完塘西北五十里而遙、為印岡之羅。……由印岡西南三十里而近、為東西塘之羅。自長者長吉始聘師友、闢齋房、訓子弟、今垂五十年矣、而独未有聞焉。長吉之族德元有孫敬夫、予聞其避俗入山、築樓叢書、扁以万巻。……樓之下有堂曰醉經、曰遠俗、曰黙、曰南、曰北云。慶元二年重陽前一日、具位楊万里記並書。

……凝婦門を出ること北東方向に約四十里の所に住んでいる羅氏は、完塘の羅氏である。武岡公（羅欽

是時廬陵有郷先生曰羅天文、以詩学最高、学者争從之。在庠序從之傾庠序、在郷里從之傾郷里。蓋来者必受、受者必訓、訓者必成也。於東修之間、雖不却亦不責。往往貧者從之多於富者之從之也。……如先生、儒其躬、又儒其子、又儒其孫、又儒其曾孫、不亦鮮乎哉。

当時、廬陵には郷里で教鞭を執っている羅天文という先生がいた。羅天文は詩経学の専門家であり、学問を志す人々は争って弟子入りした。庠序にいれば庠序の人々が、郷里にいれば郷里の人々がこぞって弟子入りした。弟子になりたい人は必ず弟子入りを許され、弟子になれば必ず学問を授けてもらい、学問を授けられれば必ず有能な人物になれるからである。報酬について、学生が持参すれば断らないが、持参しなくても責めることはない。弟子になりたい人の中には、往々にして金持ちより貧乏な人が多かった。……先生のように、自分は学者であり、また息子、孫、曾孫も学者であるということは、珍しいではないか。

さらに「羅元通墓志銘」〔『楊万里集箋校』巻一二六〕は次のように述べる。

（羅）元通以詩学名家、授徒数十百人。自三舍盛時、有声庠序、如澹菴先生胡侍読者、皆其与遊也。

（羅）元通は詩経学で家を興し、数多くの門下生がいる。羅元通は地方で栄えていた時、庠序で名声を

若）が深く広い学識、卓越した文章によって、建炎の進士になったことから、完塘の羅氏一族は栄えた。

完塘から北西五十里の所に住んでいる羅氏は、印岡の羅氏である。……印岡の南西約三十里の所に住んでいる羅氏は、東西塘の羅氏である。年長者長吉が初めて先生を迎え、学舎を開き、子弟の教育を始めから、五十年近くになったが、東西塘の羅氏一族だけは出世する人が出なかった。羅長吉の族人羅徳元には敬夫という孫がおり、彼は俗世間を離れて山に入り、樓を築いて本を収蔵し、扁額に万巻と書いたという。……樓のそばにお堂があり、それぞれの名前は醉經といい、遠俗といい、黙といい、南といい、北という。慶元二（一一九六）年重陽の前日、具位楊万里が書き記した。

こうしたことから、羅氏の子弟は教育を受け、大量の書物を読み、当地の名士と交際する機会にも恵まれていたと考えられる。

三 羅氏における「談録」の文化

羅氏は、経学や史学などのような正統な学問の教育を受ける一方で、小説や雑記の類も読んでいたようである。例えば楊万里「羅彦節墓誌銘」〔『楊万里集箋校』巻一二七〕には次のようである。

（羅）彦節每独处一室、書不去手。顧以自少得疾、亦不苦心績文。疾革、如圭輩問之、謂曰、「頗憶『邵

『氏聞見録』否。」彦節笑曰、「得非謂尹師魯事耶。聞道夕死、『聞見録』云乎哉。」

(羅)彦節は一人で部屋にいる時、書物を手放さなかった。若い頃に病気になったのを氣にかけ、苦心して文章をたくさん作ることはしなかった。病気が治った後、羅如圭らは見舞いに行き、「いったい『邵氏聞見録』の内容を覚えていいのかね」と言った。

羅彦節は笑って言った。「尹師魯の事を指すのではないかね。朝に道を聞いたら夕方に死んでもよい、これは『聞見録』に言われているものだ」と言った。

この、羅彦節が子弟の羅如圭らと『邵氏聞見録』について話をする場面から、彼らが北宋の邵伯温が編纂した筆記小説『邵氏聞見録』の内容を熟知していたことがわかる。更に、羅氏は娯楽として、子弟を集めて談論するのを好んだという記載も見られる。楊万里「羅元忠墓誌銘」(『楊万里集箋校』卷一二六)には次のようにある。

(羅元忠) 与武岡太守羅欽若、常德通判郭仲質、族子広西転運主管巨済為丘撃交。一觴一詠、容与事外、一時想見其風流。而元忠特為談者魁、滑稽玩世、拳胸中百家書、畢以資滑稽。聞者絶倒、而元忠凝然也。

羅元忠と武岡太守の羅欽若、常德通判の郭仲質、同族の子弟である広西転運主管の羅巨済は俗世間離れたことを議論する仲間である。酒を飲み、詩歌を歌い、悠悠自適の生活をおくったが、(この文章を書いていると)すぐに当時の風流を想像できる。中で

も、元忠はとりわけ談話に優れていて、滑稽な話をして世間を茶化し、頭の中にある大量の書物を引張り出し、全部笑い話の素材として用いた。聞く人は笑い転げていたが、元忠は落ち着いていた。羅元忠は談話が上手く、頭の中に蓄えている大量の典故を挙げて笑い話を語ったところ、それを聞いた人は笑い転げたという。また、楊万里「羅价卿墓誌銘」(『楊万里集箋校』卷一二九)には、

(羅維藩) 既帰、日聚族子弟、尊酒論文、澹如也。……

(羅維藩) は郷里に帰った後、日々同族の子弟を集めて、酒を飲んで文章に関する事を議論したが、あつさりとして拘泥しなかった。……

とあり、羅維藩が同族の子弟を集めて酒席を設け、文について議論していたことが記されている。

一方、廬陵の羅大経には『鶴林玉露』という書物がある。これはこうした羅氏の談論の文化を背景に作られたものだと考えられる。以下、具体的に検討してみたい。

まず『鶴林玉露』の巻甲の自序にはこうある。

余閑居無營、日与客清談鶴林之下。或欣然会心、或慨然興懷、輒令童子筆之。久而成編、因曰『鶴林玉露』。蓋「清談玉露著」、杜少陵之句云爾。時宋淳祐

戊申正月望日、廬陵羅大経景綸。

のがあれば、感慨をもよおして思いを述べたものもあり、童僕にこれを記録させた。これらの記録はだんだん増えていき、書物となったので、『鶴林玉露』と名付けた。出典は「清談玉露著」の一句であり、これは杜甫の詩から採ったものである。宋淳祐

戊申正月望日(一二四八年一月十五日)に、廬陵の羅大経景綸記す。

この自序から、『鶴林玉露』が客と語り合った内容を記録したものであり、「談録」に近い性質を持っていることがわかる。実際に内容を見てみると、やはり当時の逸話などが中心となっている。特に注目すべきは、当時この地方の文人たちが小説について談論している記載が見られる点である。同書甲篇卷二には、詩の典故と小説に関する以下の話が収録されている。

魏鶴山「天寶遺事」詩云、「紅錦綳盛河北賊、紫金盞酌寿王妃。弄成晚歳郎当曲、正是三郎快活時。」俗所謂「快活三郎」者、即明皇也。小説載、明皇自蜀還京、以駝馬載珍玩自隨、明皇聞駝馬所帶鈴聲、謂黃幡綽曰、「鈴聲頗似人言語。」幡綽對曰、「似言『三郎郎当、三郎郎当』也。」明皇愧且笑。

魏了翁(号は鶴山)によって作られた「天寶遺事」の詩には、「紅錦綳盛んにして河北賊たり、紫金盞酌寿王妃のために酌む。弄して晚歳の郎当曲と成るも、正に是れ三郎の快活する時なり。」という。世間の人々が「快活三郎」というのは、すなわち明皇(唐玄

宗)のことである。小説には次のように記載がある。

明皇が蜀(現在は四川省)から首都長安に戻り、駝と馬に珍玩を載せて自分に従わせ、その駝と馬が付けている鈴の音を聞いて、黄幡綽に言った。「この鈴の音は人の言葉に非常によく似ている。」黄幡綽は答えて言った。「まるで『三郎郎当、三郎郎当』と言っているようです。」明皇は恥ずかしくて笑った。

魏了翁作「天寶遺事」詩の典故の出処は、小説にあることを指摘しているのである。

また、甲篇卷四には、『酉陽雜俎』に収録された話に関する議論も見られる。

李績臨終、謂其弟徳曰、「吾子孫若有志氣不倫、交遊非類者、必先搃殺之而後以聞。」其言嚴厲如此。『酉陽雜俎』載、績孫敬業、年十許歳、勇悍異甚。績心患之、伺其入林獵獸、縱火焚林、敬業見火至、刳所乘馬、入其腹中。火過、浴血而出、迄不能害。臨終之戒、為敬業発也。……

李績は臨終の際、弟李徳に、「もし私の子孫の中に志が人の道から外れている人物や、相応しくない人と交遊する人物がいれば、必ずまず(その人物を)撲殺して、その後に私の位牌に報告するように。」と言った。その言論はこのように厳しかった。『酉陽雜俎』にはこのような記載がある。李績の孫の徐敬業は、年は十余歳で、大變勇猛であった。李績は彼のことを思い悩み、敬業が狩りをしに山林に入ると、火を

つけて林を焼いた。敬業は火が回ってきたのを見ると、自分の乗った馬を切りさいて、その腹の中に入った。火が通り過ぎてから、敬業は血を浴びて出てきたので、結局殺すことができなかったという。臨終の際の戒めは、敬業のために言ったのだろう。：

ここでは、『西陽雜俎』に収録された徐敬業の話が述べられている。羅大経は人々と談論を行うにあたって、しばしば世間で流行していた小説を取り上げていたと言えるだろう。

『鶴林玉露』には、欧陽修に関する記載も多く見られる。例えば乙篇卷五には以下のような話がある。

昔某帥五羊時、漕倉市舶三使者、皆閩浙人、酒辺各盛言其鄉里果核魚蝦之美。復問某鄉里何所産、某笑曰、「他無所産、但産一歐陽子耳。」三公笑且慚。

昔、私が広州の長官になった時、漕倉および市舶の官吏三人は、いずれも福建と浙江の人であり、酒席で各々故郷の果物や海鮮の旨さをさかんに語った。私の故郷では何が名産なのかと尋ねられたので、私は笑って言った。「これといった名産もない。欧陽修が生まれただけである。」三人は笑いながら恥じ入った。

この話の中で、欧陽修は一地方を代表する存在であり、それを聞いた人も恥じ入るほどの名声であったという。以上、地方の名族であった羅氏が大量の蔵書を持ち、

第二巻の題目に「東坡」の名が見られることから、この「酔翁」も東坡すなわち蘇軾と親交のあった欧陽修を指すものと考えて問題ないであろう。

「酔翁」と名付けられる笑話集は他にもあったようだ。『四庫全書総目提要』巻一四四「子部」には『酔翁滑稽風月笑談』（佚）という書物に関する記述が見られる。

『酔翁滑稽風月笑談』一卷、永樂大典本。不著撰人名氏。其書首條為「二勝環」、刺高宗不迎徽欽。又有韓信取三秦之譚以刺秦檜。蓋亦南宋人所為。

『酔翁滑稽風月笑談』一卷、永樂大典本。編者の名前は書かれていない。冒頭に「二勝環」という話が収録されているが、この話は宋の高宗が、徽宗と欽宗の南宋に帰って来ることを許さないのを皮肉っている。また韓信が三秦を奪還したという話があるが、（この話をもって）秦檜を皮肉っている。おそらく

これは南宋の人によって編纂されたものである。書名および『四庫全書総目提要』の記述から、これも笑話集だと考えられる。こうした笑話集は、実際に欧陽修によって編纂された、あるいは語られたもののだろうか。

『酔翁琴趣外篇』という書物がある。続修四庫全書に収められる『酔翁琴趣外篇』の扉には「文忠公歐陽修永叔」と題され、欧陽修によって書かれたものと明記されているが、当時の記録を検討してみると、欧陽修によって編纂されたものとは認識されていないようだ。例

当地の名士と交際し、娯楽としての談論を行っていたこと、またそうした談論の内容を記録していたことを確認した。羅燁も廬陵羅氏の子弟として、このような文化的背景の下に「談録」を作ったのではないだろうか。『酔翁談録』は、廬陵羅氏の族人である羅燁が、その恵まれた文化的環境の下で文人たちの語らいを記録し、廬陵の誇りである欧陽修の号を書名に冠したものではないか、と考えられるのである。

四 「酔翁」と名付けられる作品について

ところで、同時代に作られた書物を見渡してみると、他にも書名に「酔翁」と付けられるものが散見される。

しかしそれらは必ずしも「廬陵」という「地名」と深い関係があるわけではないようである。そこで次に、書名（あるいは巻名）に「酔翁」の名が用いられる他の書物を検討してみたい。

宋元の頃に成立したとされる『笑苑千金』は、笑話を集めて編纂されたものとされる。その目録は次のようである。

酔翁滑稽樽俎笑苑千金一

東坡五山諸家笑苑千金二

笑苑千金卷之三

新編古今砌話笑苑千金卷之四

第一巻の題目は「酔翁滑稽樽俎笑苑千金一」とあり、「酔翁」の名が冠された笑話集が存在していたことがわかる。

えば元の呉師道が編纂した『呉礼部詩話』は以下のよう

に指摘する。

近有『酔翁琴趣外篇』凡六卷、二百余首。所謂鄙褻之語、往往而是、不止一二也。前題東坡居士序近八九語、所云「散落尊酒間、盛為人所愛尚。猶小技、其上取焉」者。詞氣卑陋、不類坡作、益可以証詞之偽。

最近『酔翁琴趣外篇』という本があり、全部で六巻、二百首余りの詞が収録されている。いわゆる下品な言葉が、あちこちに見られ、一、二箇所にとどまらない。正文の前には東坡による八、九句近い序があり、「これらの詞は宴席の間に伝わって、人々に大変好まれた。つまらぬ技のようなものではあるが、中には価値あるものが存在している」という。この序の字句は浅薄で、東坡によって書かれたものとは思えないため、いよいよこの詩集が偽作であることがわかる。

この書物は、実際には欧陽修の作品ではなく（蘇東坡の序も偽作）、欧陽修の名を借りた詞集だと指摘されている。ここから推測すれば、「酔翁」と名付けられる他の作品も、欧陽修その人が実際に関与したわけではないように思われる。

ではなぜ「酔翁」の名が冠されているのだろうか。右の『呉礼部詩話』には、『酔翁琴趣外篇』の蘇東坡序が挙げられているが、ここには「これらの詞は宴席の間で伝

わって、人々に大変好まれた」という記述が見られ、収録された詞が宴席の場で人々に好まれたものだということがわかる。実際に『酔翁琴趣外篇』の内容を見てみると、そのほとんどが女性に関する詞であることが確認でき、宴席の場で好まれたという記述も納得できる。先述した『笑苑千金』所収「酔翁滑稽樽俎笑苑千金一」の「樽俎」も宴席の意味であることから、ここに収録された笑話も酒の席で語られていたものだと考えられるのである。

また、宋元の頃には、『東坡〇〇』と名付けられる書物も複数出現している。北宋の黄震によって作られた『黄氏日抄』巻四六には、こうした書物に関する興味深い記述が見られる。

自古可怪可笑、人情楽聞之説、往往転相附会、未必盡有其実。我朝東坡蘇公、一人人豪、惟其善於笑談、喜納浮屠、故至今謔浪俚談類、必託之東坡仏印、且曰東坡之見辱於仏印者如此。而本無其実也。

昔から不思議な話やおもしろい話など、人々が好む話は、往々にしてお互いにごじつけて、すべてが事実であるとは限らない。本朝の蘇東坡は、当代の傑出した人物であるが、笑い話に長じていて、仏僧と交わるのを好んだため、ふざけた話や下品な話といえ、かならず東坡、仏印の名が用いられ、さらに東坡がこのように仏印に恥をかかされることになっている。しかしこれらの話のもとより事実ではない。

黄震の指摘によれば、東坡は笑話を好み、仏僧（仏印）

し、羅燁『酔翁談録』は「羅書」とする。^[10]

金書に関する記載は、清代の目録書に見られる。例えば『藏園叢書経眼録』巻九「子部三」には以下のように述べられる。

『酔翁談録』八巻。宋金盈之撰。伝写元刊、十行二十四字。次行題、「従政郎新衡州録事参軍金盈之撰」。目後有牌子題、「皇慶二年蒼龍癸丑端陽日刊」。鈐有「秀野草堂顧氏藏書印」「朱」、「歙西長塘鮑氏知不足齋藏書印」「朱」、「何元錫印」、「夢華館藏書印」各印。「王子展藏、丁巳歲見」

『酔翁談録』八巻。宋金盈之の撰。これは元刊本を写したもので、(二葉) 十行二十四字である。二行目には「従政郎新衡州録事参軍金盈之撰」と題されている。目録の後に牌子が見られ、「皇慶二年蒼龍癸丑端陽日(一三二三年五月五日)刊」と題される。「秀野草堂顧氏藏書印」「朱」、「歙西長塘鮑氏知不足齋藏書印」「朱」、「何元錫印」、「夢華館藏書印」という印が見られる。「王子展が藏していたもので、丁巳の歳に見た。」

『酔翁談録』八巻。宋金盈之の撰。旧写本、八行二十字。題「従政郎新衡州録事参軍金盈之撰」。巻一名公佳製、巻二栄貴要覧、巻三、巻四京城風俗記、巻五瑣聞異聞、巻六禪林叢録、巻七、巻八平康巷陌記。

〔癸亥〕

『酔翁談録』八巻。宋金盈之の撰。旧写本、(二葉)

と交流したため、人々は笑話といえ「東坡」と連想したようだが、実際には必ずしも東坡と関係しているわけではないという。つまり、ここでの「東坡」はある種の記号として機能しているのである。

『酔翁〇〇』と名付けられる書物も同じように、実際に歐陽修と関わるかどうかは関係なく、ある種のイメージを伴っていたものではないだろうか。「酔翁亭記」には「酔翁」が山中で酒席を開いて友人たちと楽しんだという記述が見られた。「酔翁」は酒の席での語り、そしてそうした場で好まれる笑話や女性の話と結びつく一種の記号として用いられているのではないかと想像できるのである。事実、『酔翁談録』も笑話や女性に関する話が大半を占めている。例えば丁集巻二「嘲戲綺語」にはまたまった形で笑話が収録されており、また「私情公案」「煙粉歎合」「婦人題詠」といった篇名からも窺えるように、「酔翁談録」はそもそもそのほとんどが女性に関する話なのである。『酔翁談録』という書名には、欧陽修個人に限定されるイメージのみならず、欧陽修を祖とし、そこから派生した「酔翁」のイメージも込められているのではないだろうか。

五 金盈之の『酔翁談録』

『酔翁談録』という書物は、羅燁のもの以外にも、南宋の金盈之によって編纂されたとされる『酔翁談録』が現存している(以下、金盈之『酔翁談録』は「金書」と

八行二十字である。「従政郎新衡州録事参軍金盈之撰」と題されている。巻一名公佳製、巻二栄貴要覧、巻三、巻四京城風俗記、巻五瑣聞異聞、巻六禪林叢録、巻七、巻八平康巷陌記。〔癸亥〕

これらは清の傅增湘によって書かれた目録書である。ここから、傅增湘が見た金書はいずれも八巻で、元の皇慶二(一三二三年)年に刊行されたということ、また編者金盈之の身分は「従政郎新衡州録事参軍」であり、成立については、本文の中に「嘉定己巳」(宋寧宗一二〇九年)という情報があることから^[11]、それ以降に作られたものだとわかる。一方の羅書にも、本文に宋理宗淳祐六(一二四六)年という記載が見え^[12]、成立はそれ以降だと考えられる。金書も羅書もほぼ同じ頃に成立したと考えるよいだろう。

両書の関係についてはよくわからない。金書の巻七、巻八「平康巷陌記」と羅書の丁集「花衢記録」のみは一部の内容が重複しているが、どちらかがどちらかを参考にしたのか、あるいは同じ祖本を有しているのか、現時点では判断できる材料を欠く。^[13]

しかし、金盈之の『酔翁談録』における書名の意味については考えておく必要がある。まず、金書も書名のとおり、「談録」の性質を持つ書物であることが確認できる。例えば金書の巻三「京城風俗記」には次のような記載が見られる。

予世居京城、自渡江以来、每思風物繁盛、則氣拂吾

膺。暇日因命兒姪輩鈔錄一年景致及風俗高尚、無不備載。行將恢復、再見太平、當知予言歷歷可驗也。私は代々首都汴京に住んでいて、(南宋になって)南方へ移った後は、いつも汴京の風物や賑やかだった様子を思い、心が和まなかった。暇があれば甥の世代の者たちに年間のありさまや風俗、人びとの好みなどを書き写させ、漏れの無いようにした。世が元に戻り、再び平和な社会が訪れれば、私の言ったことが本当であることがわかるだろう。

ここでいう「予」が誰のことかはわからないが、この記述から見ると、「京城風俗記」に収録された話は、やはり誰かによって語られた瑣事や逸事を記録したものであることがわかる。

では書名に見られる「醉翁」にはどのような意味があるのだろうか。現在、金盈之という人物に関する情報は皆無であるため、唯一の手がかりである金盈之の身分「新衡州録事参军」を調べてみたところ、南宋期の「衡州録事参军」^[1]として以下の三名について確認ができた。一人目は張紱という人物である。彼は清江(現在江西省樟樹市一带)の人で、紹興年間(一一三一〜一一六二)の進士である^[2]。二人目は舒邦佐という人物で、彼は靖安(現在江西省靖安県一带)の人、淳熙年間(一一七四〜一一八九)の進士である^[3]。三人目は范応鈴という人物で、彼は豊城(現在江西省豊城市一带)の人、開禧元(一一二〇五)年の進士である^[4]。ここに見られる三人の「衡

州録事参军」は、いずれも江西の人である。偶然の可能性も高く、推測の域を出ないが、あるいは金盈之も江西の人であり、地方の誇りとしての歐陽修の名を書名に冠したと考えられるのである^[5]。

おわりに

本稿では、宋末元初の頃に編まれたとされる『醉翁談録』について、その成立の一端を明らかにすべく、書名に冠される「醉翁」および編者である「廬陵羅輝」について考察を加えた。

「談録」は、人々が集まった場で語られた瑣事、逸事を記録したものであるという共通点を持っている。特に書名が『人名十談録』の形になっているものは、特定の人物を中心として語られたものを記録するという傾向が見られたことから、『醉翁談録』も、「醉翁」を中心として語られた話を記録したと考えられるのである。

では、「醉翁」とは誰なのか。「醉翁」といえば、通常は歐陽修が想起されよう。「醉翁亭記」の影響は大きく、同時代のみならず、後世の文人たちにも大きな影響を与えている。しかし『醉翁談録』が歐陽修本人による「談録」だと考えがたい。歐陽修の「醉翁亭記」には、末尾に「廬陵歐陽修」と記されており、欧陽修、あるいは彼の作品は、とりわけ廬陵の文人たちに大きな影響と誇りをもたらしたようである。廬陵では、「醉翁亭記」の記述を真似て醉楽堂を建て、そこに集まった文人たちが語

り合うという資料も見られることから、編者の羅輝は地方の誇りである「醉翁」すなわち欧陽修の号を書名に冠したものと考えられる。つまり『醉翁談録』は、廬陵羅氏の族人である羅輝が、その恵まれた文化的環境の下で文人たちの語らいを記録し、廬陵の誇りである欧陽修の号を書名に冠した書物だと結論づけられるのである。ほぼ同時代に出現した同名の書名を持つ金盈之の『醉翁談録』についても、それが「談録」であることが確認でき、また地方の誇りとして「醉翁」の名を用いたのではないかと推測した。

一方、書名に「醉翁」と付けられる作品は他にも存在しており、それらは必ずしも廬陵と関係があるわけではない。現存するこれらの書物は、いずれも笑話や女性に関する詞を集めたもので、宴席で語られたものを収録したものである。「醉翁」は、廬陵をイメージさせると同時に、酒席での語らいをイメージさせるものでもあったのだらう。それは『醉翁談録』に笑話が収められていることや、そもそも収録される話のほとんどが女性に関するものであることも深く関連しているように思われる。

以上、本稿では、書名および編者に関する考察を通して、『醉翁談録』を、文人たちの語りの記録と位置づけた。しかし一方で、『醉翁談録』には講釈に関する記述も多く見られる。例えば甲集「舌耕序引」には「有靈怪、煙粉、伝奇、公案、兼樸刀、捍棒、妖術、神仙。自然使席上風生、不枉教坐間星拱(説話には靈怪、煙粉、伝奇、公案、

および樸刀、捍棒、妖術、神仙などがある。席上は大いに盛り上がり、風を起こし、星に周りをとりかこませるかのようなだ」とある。『醉翁談録』にこうした語り物と関係が深い記述が含まれる理由として、筆者は、文人たちの宴席で講釈師による語りが行われたか、あるいは講釈に関する話が席上で話題となったからではないかと考えている。こうした記述は、他の「談録」作品には見られないものであるが、「談録」という書名から離れ、内容の類似性から検討すると、『醉翁談録』と同様に語り物と関わる内容を持つ書物が存在している。北宋の劉斧によって編纂された『青瑣高議』、北宋の李猷氏によって編纂された『雲齋広録』、南宋末とされる皇都風月主人によって編纂された『緑窓新話』がそれである。大塚秀高氏は、これらに『醉翁談録』を合わせた四つの書物を一括して「通俗類書」として扱うべきであると指摘する^[6]。「高議」「広録」「新話」「談録」と、書名こそ異なっているが(つまりその形式にも違いが見られるが)、当時の文人たちが同じような話を好んで取り上げていたことが窺える。

今後は、大塚氏が提言した「通俗類書」を総合的に検討することによって、当時、文人たちの間でどのような物語が語られ、それがどのように広がっていったのか、またこれらの書物は語り物とどのような関係にあるのか、小説史の流れとの関係からさらに考察を進めたい。

- [1]この点については、拙稿『新編醉翁談録』の描写の特徴について、『中国中世文学研究』第六十九号、二〇一七年）を参照されたい。
- [2]『醉翁談録』には語り物に関する要素が多く見られることから、それを講釈師の種本とみなすものもある。例えば胡士瑩氏（『話本小说概論』〔中華書局、一九八〇年〕）や李劍国氏（『宋代志怪傳奇叙録』〔南開大学出版社、一九九七年〕）などの指摘がある。一方で大塚秀高氏は、『醉翁談録』には語り物の要素が含まれる話が収録される反面、そのような要素のない話も収録されていることから、『醉翁談録』を「通俗類書」であるとし、庶民もこの書物を読んでいたと指摘する（『話本と『通俗類書』—宋代小説話本へのアプローチ—」、『日本中国学会報』第二十八集、一九七五年）。また金文京氏は、『醉翁談録』が写本ではなく刊本であることから、一般読者のために編纂された読本であると指摘する（『金文京』鑑賞中国の古典』第二十三卷『中国小説選』、角川書店、一九八九年）。しかし結果的に種本として用いられたり、庶民によつて読まれることになったとしても、そもそも編者の意図はどこにあったのか、どのように編纂されたのか、といった『醉翁談録』の成立背景については、従来ほとんど議論が行われていないようである。
- [3]『談録』については、拙稿『新編醉翁談録』考一「談録」を中心として、『中国古典小説研究』第二十二号、二〇一九年（掲載予定）で詳しく論じた。
- [9]この「小説載」の話について、現時点では未見である。
- [10]金盈之『醉翁談録』について、現存する版本には三つの系統が見られる。それぞれ五卷本（清代の阮元によつて編集された宛委別藏本）、八卷本（碧琳瑯館叢書本、芋園叢書本）、八卷本（適園叢書本）である（適園叢書本は『新編醉翁談録』と題されている）。また、南宋の『百菊集譜』や明の『永樂大典』などには『醉翁談録』から引用された内容が見られるが、これらの内容は、「はじめに」で挙げたように現在の羅書の中に存在している内容もあれば（例えば『永樂大典』巻五八三八「簪花」条に引用されたものは羅書戊集巻二「煙花詩集」の内容と一致している）、金書にも羅書にも見られないものが二つ確認できる。一つは、『永樂大典』巻二四〇五「蘇小卿」（引自『醉翁談録』「煙花奇遇」）である。これは、題目の形式が羅書と類似しており、話の内容も男女の情愛を描くものであるため、もともとは羅書に収録されていた話ではないかと考えられる。もう一つは『百菊集譜』巻六「黃白菊」（注に「胡侍郎『二色蓮』詩見『醉翁談録』とある）である。『百菊集譜』には、この詩は「胡侍郎」という人物によつて作られたと注記されているが、南宋の陳景沂の『全芳備祖』ではこれを楊万里の作だとする。その詩は、「紅白蓮花開共塘 兩般顔色一般香。恰如漢殿三千女、半是濃妝半淡粧」というものである。当時廬陵に住んでいた楊万里と胡銓はしばしば詩文を書いて唱和し、楊万里は胡銓を「胡侍郎」と呼んだことから、『百菊集譜』に書かれた胡侍郎は胡銓を

[4]例えば北宋の張洎『賈氏談録』巻一に「驪山華清宮、毀廢已久、今所存者唯繚垣而已。……東南數十步復立石表、水自石表出、灌注石盆中。賈君云、『此是後人置也。』」とあり、末尾に「賈君云」という、賈公のコメントが見られる。また「賈君云、『僖昭之時、長安士族多避寇南山中、雖海經離亂而兵難不及、故今衣冠子孫居鄠杜間、室廬相比。』」と話の冒頭に「賈君云」という言葉が見られることから、この話自体が賈公によつて語られたものであることがわかる。

[5]『醉翁談録』乙集巻一「煙粉歡合・林叔茂私挈楚娘」に「醉翁曰、『忘克者、婦人之本性也。今也、楚娘題其詞而寓其怨、李氏觀其詞而並其念。江有妃謂嫡亦自悔、其李氏之謂乎。……』」とあり、己集巻二「遇仙奇會・封陟不從仙姝命」に「醉翁曰、『語云『三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也。』以常人之情、遭遇仙女、恨不得与為耦。封陟執德不回、終不曾就、誠若可愛。……』」とある。

[6]資料本文中の「」内は、本文に附された小字注である。以下同じ。

[7]楊万里は廬陵に住んでいた頃、当地の文人たちと頻繁に交流を行っていた。また楊万里の妻は羅紉（天文）の娘であることから、文集の中には羅氏に関する記載が多く見られる。羅氏と廬陵の文人たちの活動については、主に『楊万里集箋校』（中華書局、二〇〇七年）を参考にした。

[8]『邵氏聞見録』とは、宋の邵伯温（一〇六五〜一一三四）によつて編纂され（後録の三十巻はその子の撰）、宋の王安石変法に関することや当時の雑事を記録する筆記小説である。

指す可能性が高い。さらにこの詩には女性に関する描写も見られることから、羅書との関わりが深いのではないかと想像できる。金書と羅書との関係については、今後の課題としたい。

[11]金書巻一「名公佳製」に「史丞相上梁文（嘉定己巳敕賜府第）」とある。

[12]羅書乙集巻二「婦人題詠・姑蘇錢氏婦鄉記壁於道」に「宋理宗即位二十二年」とあり、淳祐六（一二四六）年に当たる。

[13]従来の研究では、金書の成立年代は羅書と近い上に、重複する一部の話を除いては羅書との共通点が見られないことから、この二書は踏襲関係にないと考えられている。黄永年『説『醉翁談録』及其撰人金盈之』（『黄永年古籍序跋述論集』、中華書局、二〇〇七年）、湯華泉『羅燁『醉翁談録』的成書年代及其中宋代詩文考察』（『新国学』、二〇一〇年）等。また、羅燁の『醉翁談録』には「新編」の二字があるが、これは祖本となる『醉翁談録』をもとに「新編」した可能性があるのではないかとこの指摘も見られる（湯華泉『羅燁『醉翁談録』的成書年代及其中宋代詩文考察』（『新国学』、二〇一〇年））。しかし金書にも「新編」の文字が見られる版本が存在しており、「新編」が何を意味するのかが現時点では判断できない。

[14]金書の扉には「新衡州録事參軍」と「新」の字が見られるが、黄永年氏は「南宋只有衡州属荆湖南路、治所衡陽即今湖南衡陽、並無『新衡州』之建置、則此『新』蓋是衍文、抑可做『新任』、『新除』解」と指摘する（黄永年『説『醉翁談録』

及其撰入金盈之」〔『黄永年古籍序跋述論集』、中華書局、二〇〇七年〕。

〔15〕『康熙』江西通志』卷七三に「張紱字子儀、清江人。紹興進士。主禮陽簿、為政廉、勤綽有時譽。調衡州録事參軍、改宜春丞。……按張紱、洽之父。所著有『愚谷集』二五卷、『歷代史年表』二十卷」とある。

〔16〕『康熙』江西通志』卷六七に「舒邦佐字輔国、靖安人。淳熙進士。為善化主簿……遷衡州司録參軍。……紹熙甲寅、朱文公帥長沙、邦佐以疾乞歸、文公賢而從之。嘉定中、授通直郎卒。所著有『双峰猥稿』九卷」とある。ここでは「衡州司録參軍」となっているが、『中国官制大辞典』（兪鹿年、黒龍江人民出版社、一九九二年）によれば、司録參軍は録事參軍の別名である。

〔17〕『宋史』卷四一〇「范応鈴列伝」に「范応鈴字旂叟、豊城人。……稍長、厲志於学、丞相周必大見其文、嘉賞之。開禧元年、举進士、調永新尉。……調衡州録事、総領聞応鈴名、辟為属……」とある。

〔18〕例えば『鶴林玉露』丙篇卷三には「江西自欧陽子以古文起於廬陵、遂為一代冠冕。後來者、莫能与之抗。其次莫如曾子固、王介甫、皆出欧門、亦皆江西人。……朱文公謂江西文章如欧永叔、王介甫、曾子固、做得如此好、亦知其暗皓不可尚已。」とあり、江西は多くの著名な文人を輩出したが、その代表として廬陵の欧陽修が挙げられている。

〔19〕大塚秀高「宋代の通俗類書―『青瑣高議』の構成・内容よりにみる―」（『日本アジア研究』第六号、二〇〇九年）。